

シリーズ・馬電の思い出



⑤ 創立当時の思い出（昭和34年・5989***）

篠崎 辰夫

あれからもうまもなく「半世紀」が経とうとしている。当時入社した人はすでに定年で会社を去って久しい。本館とヒマラヤ杉が当時のおもかげを残しているが、中身は様変わり。作る物も、作り方も、仕事のやり方、環境も大きく変わった。馬電の歴史は自分自身の歴史でもある。パソコンも電卓もない時代、どうやって仕事をしていたか・・・初心を忘れないために、創立当時を振り返ってみた。

(1) 当時の構内の様子

- ・ 木造の本館は、白亜の洋館のようで、高い煙突、ヒマラヤ杉とともに工場のシンボルだった。その本館は今でも健在だが、煙突はもう無い。本館裏の技術センターは、当時はバレーコート、テニスコート。本館2階から眺めると眼下は広々と、まるで公園のようだった。その裏の現在の食堂は、もと体育館。なぜか床はコンクリートで、ころぶと怪我をした。
- ・ 通勤は自転車か通勤バス。車通勤など考えられなかった。毎朝何台もの東武バスが連ね若さに溢れた女性達が降り立つ。この時間正門前は大変なにぎわいだった。夜間高校に通学する人もいて、学生服姿で通勤する人も目立った。構内には大きな自転車置き場が何か所かあった。
- ・ 第三工場が当初の組立工場で、ここで掃除機が生産された。「TC-203形:定価15500円」。今はもっと安く買える。まさに物価の優等生。ちなみに当時よく残業で食べたラーメンは45円だった。尾島のなんとかいうラーメン屋はうまかった。なぜか45円を覚えている。

(2) 開所式

- ・ 昭和34年5月に、県や町、三菱電機幹部らの来賓を招いて開所式が行われた。会場は第一工場の一角。そこに「ペギー葉山」が招かれた。歌った中の一曲が「南国土佐をあとにして」。この曲ができたのが同じ昭和34年5月。出来たばかりの曲。彼女の姿や顔は覚えていないが、この曲だけは覚えている。そのあとこの曲はみるみる大ヒット、彼女の代表曲となった。この曲を聞くと、当時の開所式の様子がよみがえってくる。馬電と同じ年の曲である。

(3) 当時の仕事の様子

- ・ 事務所内は、冬はスチーム暖房で快適だったが、夏はたいへんだった。もちろんエアコンなんてなく扇風機。それも伝票や書類が飛ぶので仕事中はかけられない。汗で伝票や書類が手や腕にくっついて仕事にならない。黒い腕カバーは必需品だった。なにより伝票は大切だった。
- ・ 売上の計算は、全国から送られてくる伝票をソロバンではじく。達成率などの比率計算は、計算尺が重宝した。「計算尺」は、当時を象徴するものとして今でも大事にとってある。
- ・ 複数の書類や伝票は、中にカーボン紙を入れて書く。力がある。アンモニアくさい「オザ」とか、「バンダー」とかいうコピー機があったが、やたら手が汚れた記憶がある。正式な文書は、専門のタイプライターを打つ女性がいて一文字ずつ拾って打つ。電話は部屋に数台しかなく、外線は専門の交換手がいて、いちいちそこを経由する。書類も、専門の「私送便」のおじさんが東京の本社へ毎日大きなカバンを持って往復する。何もかも人海戦術だった。

これを思うと、今は何と便利で快適なことか・・・

今はパソコンがみんなやってくれる。実績は翌朝には表とグラフで一目瞭然。判断も早い。「報・連・相」はメールでほとんどを行う。パソコンは1人1台、空調のきいた部屋でみんな黙々とパソコンに向かって仕事をしている。パソコンがないと仕事にならない。この落差たるや・・・

しかし、そのためにコミュニケーションが希薄になったような気がする。隣りの人とのやりとりもメールで済ますらしい。また、パソコンになってすっかり字を書かなくなった。文字は「書く」から「打つ」になった。

漢字は「変換」というプロセスが加わった。これが漢字忘れの根源。今その変換さえ覚束なくなった。

「計算」も電卓になって脳を使わなくなった。今「認知症」が増えたのも、これらのせいかも知れない。

今から思うと、当時は不便な環境の中で一生懸命がんばっていた。それが活力を生み、様変りの原動力になったように思う。……「初心忘るべからず」